軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート14

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

米国ケンタッキー見聞記・パートⅧ

この見聞記も今回が最終回。そこで，これまでの７回に亘るレポートを総括してみた。

総　括

１．種牡馬

種馬場あるいは個々の種牡馬によって，放牧時間や運動量は異なるが，総体的にBCSは高く，頸の肥厚が目立ち，肢への負担が懸念された。適度な乗り運動を行い，余分な脂肪を落とし，筋肉を付けて見栄えの良い健康な馬をつくるべきであろう。歳を重ねるごとに脂肪が付き，体は硬くなる。人も馬も同じで，健康維持のための適度な運動が必要不可欠であろう。そのためにも肢蹄に不安があると運動できないので，肢蹄の管理には注意したいところである。さらに，種牡馬の肢曲がりも散見されたが，種牡馬の体型(外貌)や肢勢を重視している生産者も少なくないことから，生産馬の購買率を高めるためにも種牡馬の肢蹄管理への配慮が必要であろうと感じた。

２．蹄病治療

装蹄治療は通常の装蹄よりも労力がかかり，装蹄師自体に興味や熱意がなければ実践できない技術である。通常，日本では一人の装蹄師が削蹄，造鉄や蹄鉄加工までの全ての工程をこなさなければならないが，ケンタッキーの一部では，装蹄療法専門の装蹄師や獣医師が蹄の型取り(トレース)を行い，蹄鉄工務員が指示通りの特殊蹄鉄を造る分業制が根付き始めている。蹄鉄作業場には，色々な素材や鍛冶用工具が多数揃っており，求められる蹄鉄を自在に作製することができる。そのような先端体制を構築し，肢蹄のあらゆるトラブルに対処する現地の姿勢に敬意を表したい。ただし，残念ながら日高とケンタッキーとの歴史や環境に違いが大きく，ケンタッキーの蹄病センターを日高に立ち上げたとしても，成功はまずおぼつかないであろう。

３．開業装蹄師

日本のように自家削蹄を行う牧場はまずない。いずれの牧場も，必ずプロの開業装蹄師に委託して，当歳馬の肢蹄管理を行っている。特に肢蹄管理に力を入れている牧場では，生後２週間でマネージャーや厩舎スタッフとともに開業装蹄師が歩様・肢勢を確認する。通常は生後３ヵ月齢までは，２週間毎にチェックし，異常があれば開業装蹄師が矯正を行う。ちなみに肢勢トラブルは内外高低差で矯正するよりもエクステンションを接着して治す方が効率的であり，蹄に優しい。

終わりに

今回視察した牧場は大手であり，施設がすばらしく，蹄管理もしっかり施されていた。今回の見聞内容が，ケンタッキーのすべてであるとは言えないが，見習いたい対応であった。一方，筆者は常々「馬づくりは，人づくり」という理念の下，馬本位に関係者が努力してこそ優駿がつくれると思ってきたが，まさにケンタッキーのホースマンたちの多くは，大らかで馬を第一に考え，馬のために何が良いかを考えて仕事をしていた。３日間と言う短い期間ではあったが，新たな発見や今まで抱いていた疑問も幾つ解消することができた。

PS：写真は，牧場巡回中に撮影した記念の１枚。左はRodney King装蹄師。右端のScott E. Morrison獣医師と共に2010年２月に日本装蹄師会が招聘し，静内にて公開講演を行ったので，見覚えのある読者もいることだろう。右から二人目はJeff Henderson装蹄師。装蹄師と肢蹄専門の獣医師がタッグを組むことで彼らのチームワークは大きな効果を上げている。さて，左から二人目は，JBBA静内種馬場 軽種馬生産技術総合研修センターの田中弘祐(筆者)である。

左から Rodney King装蹄師，総合研修センター田中弘祐調査役，Jeff Henderson装蹄師，Scott E. Morrison獣医師